

## 30周年を振り返って

1988年辰年7月、日本で初めて22人乗りのドラゴンボート・スタンダード艇の大会が大坂・大川で誕生しました。

当時、プロ野球の元太平洋クラブライオンズ球団幹部で、会場に隣接する大阪キャッスルホテルの総支配人の故・青木一三氏から「水の都・大阪を活気づける水上イベントが出来ないか？」との提案を受けて、当時サンケイスポーツに在籍していた結城肇氏が、香港で大人気だったドラゴンボートを誘致したのがその始まりでした。

当時は、バブル景気まっただ中、金融系企業から1億円を超える協賛金が集まり、欧州、豪州、アジアから多くのチームを招待。前夜祭もホテルで華やかに行われ、国内からは「好きやねん大阪」や「相生ペーロン選抜IHI」など全26チームが参加し、第1回に相応しい幕開けとなりました。

しかし、3年後の1991年、突然バブル景気がはじけ、スポンサーが撤退、大会は中止を余儀なくされました。翌年からは、海外招待チームなし、サブイベントなしとありとあらゆる経費を削減、大会参加料と僅かな協賛金で開催することとなりました。

これを受けて2012年からは協会を社団法人化し、スポーツ庁の外郭団体・日本スポーツ振興センターからの助成金も得て何とか大会を継続することができるようになりました。

そんな中でも、ドラゴンボートは伸展を続け、現在は87か国で5千万人を超える競技人口を誇り、国内でも日本オリンピック委員会が選手派遣するアジア競技会や東アジア大会にも正式競技として採用され、日本チームも海外で活躍する場面が増えています。

年月が経ち参加者も2代目、3代目となっていますが、30年前と現在でも全く変わらないことがあります。それは限りないドラゴンボートへの愛情です。

創設期から30年間連続出場を果たしている「好きやねん大阪」は初代代表の太田輝男さんから現在の2代目代表の左近充次成さん（58歳）に受け継がれていますが、チームが継続してこられたことについて、「あっという間の30年でした。今では息子も入り家族で楽しんでいます。屈指の強豪チームと同じ土俵で戦える醍醐味や、22人が一つに成る究極の団体競技がドラゴンの魅力ですね！太田氏が大切にしていた絆を胸に多くのドラゴン仲間が増えればと…漕ぎ続けています」とドラゴン愛が今もチームに脈々と流れていることを語ってくれました。